

ふでのまにまに 三の巻

菅江真澄著。文化十三年（一八一六年）。『菅江真澄全集』第十卷（未来社）所収より。東洋文庫143 『菅江真澄随筆集』所収の「筆のまにまに」では「夢庵」は「草庵」となっているが、「春咲ぬこゝろや花のふかみ草」は室町時代中期の連歌師肖柏（号・夢庵）の句であるから『菅江真澄全集』の「夢庵」をとるべきである。

ぼうたむ

牡丹をぼうたむとは『枕ノ冊子』によめり。春咲ぬこゝろや花のふかみ草 とはかの夢庵の句也。牡丹はあがくにつものならざるよしをむかしよりもはらいへり。『玄同放言』二卷に山牡丹の事を載て、遠江國戌亥村の水上の大牡丹の事を『煙霞綺談』を引て出せり。また鈴木素行が『神農本経解故』卷八云、本邦牡丹無_二山生者_一惟遠江州山中_ナ有_ニ之云未_レ詳といひし云々、と見えたり。牡丹は信濃国岐蘇

山の奥にもいと多しといふ。おのれ戸隠山に登りし秋、道トキにて志垣村の人としまらるかたらひ、紅葉狩の謡曲にしがシカキきの道のさかしきにとある、そはまことに志垣村あり。しがきシカキ（は）鹿垣を云へるにや。此山路にも鹿柵いと多し。

また後より来連る男あり。鬼無里とて紙漉村の人也。此

三四人なにくれかにくれと語りもて行くに、戸隠山、飯綱イツナノ

獄などの山々いと重く、西南木曾の山々続て其谷々には苑ツギ

原山の如に木賊多し。また余五將軍の征伐給ひし鬼を埋た

る地は鬼無里の邊に紅葉山幕が入りなワタリンどいふ処にあるて

ふ。其谷々に真麻黄あり。此草まれくにあれど生る処は

残雪に穴あり。また白牡丹多しといへり。また越後ノ国のハルユキ

画工梅典といふ人語りけるは、一とせ鬼無里村の松巖寺と

て禅林あり。此寺に在りしに庭に大蝦蟇いと多くてこゝらカヘル

鳴くにふしもつかれざりき。戸隠嶽に並ぶ飯綱山の坤の方イツナ

に中て虫食山といふ嵩山あり。此山に人にいざなはれて五アタリ

月廿八日攀登り見れば、紅葉といふ鬼女の住たりし巖窟とオニ

て、その峒の入り口三十間斗り広く、奥深ホラサ五十間余りなか

らは土に埋たり。また八箇竈といふ処あり。細き滝おちてヤツノ

タビタニ シロ

マサカリ

いと淋しき奥山也。幽谷は白花ノ大輪の牡丹眞盛にて谷底も雪のいまだに残るかと思えし。また嶺は菊のいと多く、秋はいろくの花咲見る目もあやに、風によて遠くまで吹きおろし吹送る香の麓までかぐはしうにほふといへり。また

た美濃国の（後略）